

Book Preview

富山高校図書館 2023.6



『 川のほとりに立つ者は 』

寺地 はるな【著】

カフェの若き店長・原田清瀬は、ある日、恋人の松木が怪我をして意識が戻らないと病院から連絡を受ける。松木の部屋を訪れた清瀬は、彼が隠していたノートを見つけたことで、恋人が自分に隠していた秘密を少しずつ知ることに——。「当たり前」に埋もれた声を丁寧に紡ぎ、他者と交わる痛みとその先の希望を描いた物語。 2023年本屋大賞ノミネート作品。

『 ちくま新書 批評の教室 』

北村 紗衣【著】

批評はなによりも、作品を楽しむためにあります。本書では、批評を「精読する」「分析する」「書く」の3つのステップに分けて、そのやり方を解説していきます。チョウのように軽いフットワークで作品を理解し、ハチのように鋭い視点で読み解く方法を身につけましょう。必要なのは、センスではなく調査力と注意深さ。そしていくつかのコツを飲み込めば、誰でも楽しく批評ができます。作品をより深く理解し、たくさんの人とシェアするための、批評の教室へようこそ。



『 爆弾 』

呉 勝浩【著】

東京都民を人質にとった連続爆破テロ事件をめぐる、爆弾魔と警察の攻防の話。微罪で捕まったスズキタゴサクと名乗る男が、1つ目の爆発の予言を的中させるところから物語は始まります。「あと3度ある」と言われる爆発を止めるため、警察はスズキから与えられる僅かなヒントを頼りに爆弾を捜索。しかし、スズキはのらりくらりと刑事の追及をかわし、「命は平等って、ほんとうですか?」と読み手の正義感を試すような言葉を吐きます。そして、新たな事件が発覚し、やがて物語は驚きの結末を迎えます。

『 つながり続けるこども食堂 』

湯浅 誠【著】

コロナ禍にも無縁社会にも負けない「縁」を紡ぎ続けています。「誰でもどうぞ」と、こども食堂はつくられた。子どもたちは、お腹がすいたという理由で立ち寄れる。大人たちにはご飯以外に、ちょっとずつ「役割」もあるし、「子どもたちのため」という「言い訳」も用意してある。だから、誰でも気楽に立ち寄れて、人とつながることができるのだ。人々の生きづらさを和らげ、孤立と孤独を防ぎ、誰一人取りこぼさない社会をつくるための可能性を、こども食堂は秘めている



『 それでも君は医者になるのか 』

中山祐次郎【著】

今、医者になる意義とは? やりがいとは? 読めば胸が熱くなる一冊! 本書は現役の外科医で小説家でもある中山祐次郎さんが、大きな変革期を迎えている医療の世界の実像をリアルに、そして熱く描き出す一冊です。コロナ禍では、医療従事者とりわけ「医師」に対する注目度が増し、日米では大学医学部の志望者が増えています。今、医者になる意義とは何か。そのやりがいとは、患者の命を救うとはどのようなことか。そして、医者年収は実際のところいくらか、働き方改革で激務は解消されるのかなど、余すところなく明かします。